

## 中世における『万葉集』享受の一樣相

——『名所和歌抄出』を中心に——

赤瀬 知子

### はじめに

宗祇晩年の連歌学書『浅茅』は、後半部に名所に関する記述を有し、一八七箇所の名所について一首ずつの和歌といくつかの寄合語や歌句とを掲げている。このいわゆる『浅茅』名所部がどのような書物に基づくのかという、典拠の問題についてかつて考察してみたことがある。従来は勅撰集や百首歌から直接収集されたと考えられていた名所歌であるけれども、収められた名所やその並べ方などを詳しく調べると、西尾市岩瀬文庫に蔵される『名所和歌抄出』に近似した名所歌集に基づくものと考えられた<sup>1)</sup>。

西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は、中世の文学を

考える上で貴重な資料とみられ、昨年三月に一冊の翻刻として上梓した（拙著『西尾市岩瀬文庫蔵 名所和歌抄出』文栄堂、平28・3）。該書は江戸時代初期頃の書写であるが、成立年代は十四世紀頃かと推定されている<sup>2)</sup>。八〇一首の和歌（二連の連歌を含む）を収め、なかに一五一首という多くの万葉歌を含む。また『万葉集』に関連する寄合語や歌句（以下、万葉集の歌句と記す）も二七一句を載せる（巻末の表Ⅰ・表Ⅱ参照）。そこで今回は『万葉集』との関わりという視点から、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』について少々考えてみたい。それが宗祇の『万葉集』享受に近づく一歩であり、中世における『万葉集』享受の一面を解明する糸口になると考えるからである。

# 一 宗祇『浅茅』と『名所和歌抄出』

宗祇『浅茅』名所部（金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第六集の影印による。ただし、歌番号については木藤才藏校注『中世の文学 連歌論集二』の翻刻による。以下、同じ）と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』（原本複写による。ただし、歌番号については前掲拙著『西尾市岩瀬文庫蔵 名所和歌抄出』による。以下、同じ）との関連については、すでにある程度指摘したことはあるが、ここではそれを万葉歌を軸にしてあらためて検証してみたい。『浅茅』名所部には計一八七首の和歌が収められているが、そのうちの三四首が万葉歌である。そこで、『浅茅』名所部と『名所和歌抄出』とでまず、その三四首の万葉歌の配列を比較してみる（次表の最初の漢数字は『浅茅』名所部の歌番号、次に『浅茅』名所部の万葉歌の初句、括弧内が『万葉集』における歌番号、「抄出」は岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の略、次が岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の歌番号である。なお、『万葉集』の歌番号は旧国歌大観による）。

|    |       |        |       |    |
|----|-------|--------|-------|----|
| 九  | 秋の野に  | (七)    | 抄出    | 一六 |
| 三五 | たかまとの | (一六〇五) | 抄出にナシ |    |
| 四〇 | 乙女子か  | (五〇一)  | 抄出    | 八七 |

|     |       |        |       |    |
|-----|-------|--------|-------|----|
| 四一  | よし野なる | (三七五)  | 抄出    | 九四 |
| 六一  | 大ともの  | (六六)   | 抄出一五六 |    |
| 六二  | さ夜ふけて | (一一四三) | 抄出にナシ |    |
| 六五  | いさやこ、 | (六三)   | 抄出一六二 |    |
| 六七  | 住吉の   | (一一五六) | 抄出一六四 |    |
| 七六  | さ、波や  | (三〇)   | 抄出二〇四 |    |
| 八三  | 大御船   | (一一七一) | 抄出二二四 |    |
| 八四  | いつくにか | (一一七二) | 抄出二二九 |    |
| 八七  | 夕た、み  | (二〇一七) | 抄出二三四 |    |
| 九〇  | 今朝ゆきて | (一八一七) | 抄出二六〇 |    |
| 九六  | ひくま野に | (五七)   | 抄出三二四 |    |
| 一〇〇 | たこの浦に | (三一八)  | 抄出三三四 |    |
| 一〇二 | まつち山  | (二九八)  | 抄出三六三 |    |
| 一〇九 | むは玉の  | (一二四一) | 抄出三七三 |    |
| 一二四 | いさ、めに | (四二〇一) | 抄出四九二 |    |
| 一二五 | みなとかせ | (四〇一八) | 抄出四九三 |    |
| 一二六 | 大さきの  | (三〇七二) | 抄出四九〇 |    |
| 一四八 | いわみ野や | (一二三二) | 抄出五九〇 |    |
| 一四九 | いなみ野の | (九四〇)  | 抄出五九五 |    |
| 一五〇 | ともし火の | (二五四)  | 抄出五九七 |    |
| 一五六 | わかぬ浦に | (九一九)  | 抄出六五一 |    |

一五八 いはしろの (一四一) 抄出六五九  
 一五九 もかり船 (一一九九) 抄出六六四  
 一六七 難波かた (一一六〇) 抄出七〇九  
 一七三 しかのあまは (二七八) 抄出七三三  
 一七四 千はやふる (一二三〇) 抄出七三六  
 一七五 おもはぬを (五六一) 抄出七三七  
 一七八 いさやこ、 (九五七) 抄出七四七  
 一八二 とよ国の (四一八) 抄出七六三  
 一八三 君を待 (八六五) 抄出七六九  
 一八四 たま嶋の (八五四) 抄出七七一

『浅茅』名所部と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とで歌番号の流れをたどってゆくと、二首の万葉歌(『浅茅』名所部三五、六二)が『名所和歌抄出』に見られないものの、両者の万葉歌の配列は、一箇所(『名所和歌抄出』四九〇)を除いて、ほぼ完璧に一致しているとみてよい。このことから、収められた名所やその並べ方のみでなく、万葉歌の配列からみても、『浅茅』名所部は岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に近似した名所歌集に基づくものと考えられるのである。

次に、『浅茅』名所部の万葉歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌とで、本文の異同について考えてみる。

両者を比較した結果を次に示す<sup>(3)</sup>(割合(%)は小数点以下第二位を四捨五入する。以下、同じ)。

全句一致 二一首 六一・八%  
 一句に異同 六首 一七・六%  
 二句に異同 五首 一四・七%

(『名所和歌抄出』に該当歌ナシ)二首 五・九%

「全句一致」というのは両者に異同のみられない場合、「一句に異同」というのは『浅茅』名所部の歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の歌とで計一句に異同のある場合、「二句に異同」というのは計二句に異同のある場合を指す。さらにそれぞれの歌数について全三四首中に占める割合を示す。右にみられるように『浅茅』名所部の万葉歌は、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌に「全句一致」するものが全体の六〇%を超えている。この数値はあるいはあまり高いものとはいえないかも知れない。しかしながら、先に示したような両者の配列のきわめて緊密な一致を考えれば、それなりに重みのある数値と思われるのである。

そこで次に両者の万葉歌が「全句一致」する例を二例掲げる(便宜上、集付は省略する。以下、同じ)。

乙女子か袖ふる山のみつかきの久しき世より思ひそ

めてき

〔浅茅〕名所部四〇

乙女子か袖ふる山の瑞籬の久しき代より思ひそめて  
き  
〔名所和歌抄出〕八七

〔浅茅〕名所部の「乙女子か」歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「乙女子か」歌とは、漢字・仮名の違いや「世」と「代」の違いなどの他に異同はなく、二首はほぼ一致しているとみなされる。また、

たま嶋のこの川上に家はあれと君をやさしみあらは  
さすありき  
〔浅茅〕名所部一八四

玉嶋の此川上に家はあれと君をやさしみあらはさす  
ありき  
〔名所和歌抄出〕七七一

〔浅茅〕名所部にみられる「たま嶋の」歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「玉嶋の」歌とは、漢字・仮名の違いを除いて一致しているとみてよい。これらの他に  
〔浅茅〕名所部の万葉歌が岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に「全句一致」するのは、次の一九首である。

九秋の野に、四一よし野なる、六七住吉の、八三大御船、八四いつくにか、九〇今朝ゆきて、九六ひくま野に、一〇〇たこの浦に、一〇二まつち山、一〇九むは玉の、一二五みなとかせ、一二六大きな、一四八いわみ野や、一五六わかか浦に、一五八いは

しろの、一六七難波かた、一七三しかのあまは、一七五おもはぬを、一八二とよ国の

このように、〔浅茅〕名所部の万葉歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌とは、その配列からみても、本文の異同からみても、互いに照応することが少なくないのである。まだ精査する必要があるものの、宗祇が〔浅茅〕名所部を執筆する際に、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に近似する名所歌集の万葉歌を参照したという可能性は、かなり高いように思われる。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は、宗祇の『万葉集』享受を考える上で、重要な手がかりのひとつになるものと考えられる。

## 二 宗祇『万葉抄』と『名所和歌抄出』

宗祇の『万葉集』抄注本としても有名なのは、宗祇『万葉抄』（佐佐木信綱編『萬葉學叢刊 中世編』による。以下、同じ）であろう。広本と略本とが知られており、広本は『万葉集』から千首程度の歌を選び出して、そのうちの三分の一弱の歌に注解を施したものとされる<sup>(5)</sup>。では、宗祇『万葉抄』（広本）と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』との間に関連はあるのだろうか。それを探るために、まずは前述と同じ三四首（ここでは三三首<sup>(6)</sup>）の万葉歌

について両者の配列を比較してみる（次表の初めの漢数字は宗祇『万葉抄』における頁数、上下は宗祇『万葉抄』の上下段の別、次に宗祇『万葉抄』の万葉歌の初句、以下は前章と同じ）。調査の対象を前章と同じ三四（三三）首に限ったのは、『浅茅』名所部と同じ万葉歌を宗祇『万葉抄』がどのように取り入れているかを考えるためである。

|      |       |        |       |
|------|-------|--------|-------|
| 一九六上 | 秋の野に  | (七)    | 抄出 一六 |
| 二四〇下 | 高円の   | (一六〇五) | 抄出にナシ |
| 二一七上 | おとめこか | (五〇一)  | 抄出 八七 |
| 二二三上 | 吉野なる  | (三七五)  | 抄出 九四 |
| 二〇一上 | 大ともの  | (六六)   | 抄出一五六 |
| 二二九上 | さ夜ふけて | (一一四三) | 抄出にナシ |
| 二〇〇下 | いさ子とも | (六三)   | 抄出一六二 |
| 二二九下 | 住よしの  | (一一五六) | 抄出一六四 |
| 一九八上 | さ、浪の  | (三〇)   | 抄出二〇四 |
| 二二九下 | いつくにか | (一一七二) | 抄出二二九 |
| 二二五上 | 木綿た、み | (一〇一七) | 抄出二三四 |
| 二四六上 | 今朝ゆきて | (一八一七) | 抄出二六〇 |
| 二〇〇上 | ひくま野に | (五七)   | 抄出三二四 |
| 二一一上 | 田子の浦に | (三一八)  | 抄出三三四 |
| 二一〇下 | まつち山  | (二九八)  | 抄出三六三 |

|      |        |        |       |
|------|--------|--------|-------|
| 二九二上 | いさゝめに  | (四二〇一) | 抄出四九二 |
| 二八七下 | 湊風     | (四〇一八) | 抄出四九三 |
| 二七一上 | おほさきの  | (三〇七二) | 抄出四九〇 |
| 二〇三下 | 石見野や   | (一三二二) | 抄出五九〇 |
| 二二四下 | いなみ野の  | (九四〇)  | 抄出五九五 |
| 二〇八下 | ともし火の  | (二五四)  | 抄出五九七 |
| 二二三下 | 和歌の浦に  | (九一九)  | 抄出六五一 |
| 二〇六上 | 岩代の    | (一四一)  | 抄出六五九 |
| 二三〇上 | もかり船   | (一一九九) | 抄出六六四 |
| 二二九下 | 難波かた   | (一一六〇) | 抄出七〇九 |
| 二一〇上 | しかの海士は | (二七八)  | 抄出七三三 |
| 二二〇上 | ちはやふる  | (一二三〇) | 抄出七三六 |
| 二一八上 | 思はぬを   | (五六一)  | 抄出七三七 |
| 二二四上 | いさやこら  | (九五七)  | 抄出七四七 |
| 二二四下 | 豊国の    | (四一八)  | 抄出七六三 |
| 二二二上 | 君をまつ   | (八六五)  | 抄出七六九 |
| 二二二下 | 玉しまの   | (八五四)  | 抄出七七一 |

右は岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の配列を基準にしている。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の歌番号の進行につれて宗祇『万葉抄』の頁数が移行しているかという点、必ずしもそうではない。すなわち、同じ万葉歌を取り入

れながら、両者の配列は一致しないことが多いのである。ただし、それは宗祇『万葉抄』が基本的に『万葉集』の流れに即した注釈書であるのに対して、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は名所を国別に並べた名所歌集であるという、両者の編纂方針の違いに起因することが大きいのではないかと思われる。ちなみに注意を引くのは、例の万葉歌三二首が宗祇『万葉抄』の上巻に集中していて、下巻にはわずか四首（『万葉集』十・一八一七、十二・三〇七二、十七・四〇一八、十九・四二〇一）しか見られないということである。こうしたことについては、今後さらに考える余地があろう。

次に、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』との本文の異同について、第一章と同様にみてゆく。

|       |     |       |
|-------|-----|-------|
| 全句一致  | 一二首 | 三七・五% |
| 一句に異同 | 一三首 | 四〇・六% |
| 二句に異同 | 三首  | 九・四%  |
| 三句に異同 | 二首  | 六・三%  |

（『名所和歌抄出』に該当歌ナシ）二首 六・三%

興味ぶかいのは、「全句一致」する場合と「一句に異同」のある場合とで歌数がほぼ同数で、割合も四〇％前後とほぼ一致することである。ただし、その割合は『浅

茅』名所部の場合の六〇％という数値よりはやや低い。『浅茅』名所部と宗祇『万葉抄』とで、同じ万葉歌を取り入れながら本文が必ずしも一致する訳ではないというのは、何故だろうか。両者の依拠した先行資料の問題だろうか。それとも、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の約一五〇首からは、宗祇『万葉抄』の約千首の万葉歌を収集しにくかったという事情も加わるのだろうか。

ともあれ、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の本文が「全句一致」する例を次に二例掲げておく。田子の浦に打出てみれば白妙のふしの高ねに雪はふりつ、

たこのうらに打出てみれば白妙の富士の高ねに雪は降つ、

宗祇『万葉抄』の「田子の浦に」歌と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「たこのうらに」歌とは、漢字・仮名の違い以外に異同はなく、両者は一致しているとみてよい。また、

おほさきのありそのわたりはふ葛の行かたなくや恋わたりなん  
（宗祇『万葉抄』）  
大さきのありそのわたりはふくすの行方なくや恋わたりなん  
（『名所和歌抄出』四九〇）

両者は漢字・仮名の違い以外、異同はないものとみられる。これについて『万葉集』（『万葉集』諸本の訓や略号は『校本万葉集』（新增補版）に従う。以下、同じ）十二・三〇七二をみると、『万葉集』の一般的な訓は第四句を「ユクヘモナクヤ」とする。これに対して、元暦校本は「ゆくかたなしや」と記し、「し」の右に「ク」の朱書、類聚古集は「ゆくかたなくや」、古葉略類聚鈔が「ユクカタナシヤ」、西本願寺本・細井本・神宮文庫本が「ユクカタナクヤ」、ただし西本願寺本は「カタ」の右に「エモイ」という傍書を付すなどの異同がある。宗祇『万葉抄』の「行かたなくや」という本文は、類聚古集・細井本・西本願寺本などの訓に一致しており、それが岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「行方なくや」にも一致するものとみなしうる。このように宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とは、やや特殊な本文を共有することがあり、両者の関係を考える上で注目される（なお後述。ちなみに、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の「行方なくや」は、音数から「ゆくかたなくや」と理解した）。次に「全句一致」する他の十首を、宗祇『万葉抄』の配列に従って掲げておく。

二〇三下石見野や、二一三上吉野なる、二一四下豊

国、二一七上おとめこか、二一八上思はぬを、二二下玉しまの、二二三下和歌の浦に、二二九下住よしの、二三〇上ちはやふる、二八七下湊風

以上のことから、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とは、万葉歌の配列において異なる場合が少なくないけれども、それは両者の編纂方針の差異に拠るものと考えられた。一方、本文の異同について『万葉抄』が『名所和歌抄出』に一致する割合は、『浅茅』名所部のそれに比べてやや低いとはいえ、四〇%近くに及んでいるのである。そこに、宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』とのある程度の照応関係をうかがいうるように思う。宗祇『万葉抄』がどのような『万葉集』に基づいたのかを考える際、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に似た名所歌集も考慮に入れる必要があるのではないかと思われる。宗祇『万葉抄』に収める万葉歌は約千首にのぼり、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の影響について今後の検討が俟たれる。

#### 付、宗祇『万葉抄』と『万葉集註釈』

宗祇『万葉抄』の万葉歌に関して、仙覚『万葉集註釈』（京都大学国語国文資料叢書別巻二「仁和寺蔵 萬葉集註

釋 仙覺抄』による。以下、同じ）との関係に触れておかなければならないだろう。それについては現在のところ、次のような指摘がなされている。

○『宗祇抄』（宗祇『万葉抄』―引用者注）は従来の訓のままによんでゐるのに対して、『奈良之葉』では、『ほしたり』『ましろにそ』といったところに新点を取り入れようとしてゐる…（中略）…『宗祇抄』の方が新点を採用してゐるものもかなりあり<sup>8)</sup>

○宗祇抄（宗祇『万葉抄』―引用者注）の万葉歌の本文については、仙覺新点を一部に含みながらも、仙覺以前の次点本に依拠しているであろうことが指摘されている。<sup>9)</sup>

○歌の訓は、西本願寺本系のそれではなく、もう少し古い『類聚古集』・細井本等の古訓のようである。<sup>5)</sup>

○『万葉抄』の編集の第一段階に使用した『万葉集』の本文は…（中略）…大まかに言えば、仙覺の校訂本より古い性質を多く含んでおり<sup>4)</sup>

すなわち、宗祇『万葉抄』の万葉歌の本文は、仙覺新点を一部に含みながら、仙覺以前の次点本に基づいている場合が多いというのが一般的な見解のようである。<sup>10)</sup>そこで、今度は宗祇『万葉抄』の前述の三二首を仙覺『万

葉集註釈』と比較してみる。注目されるのは、仙覺『万葉集註釈』に一致するのが三二首のうちの七首の歌のみ（『万葉集』四・五〇一、三・二九八、三・二五四、二・一四一、四・五六一、六・九五七、五・八五四）であることだろう。つまり、宗祇『万葉抄』と仙覺『万葉集註釈』とは、一致する歌がずいぶん少ないのである。<sup>11)</sup> その七首を宗祇『万葉抄』の配列に従って並べてみると、次のようになる（初めの漢数字は宗祇『万葉抄』の頁数、上下段の別、宗祇『万葉抄』の初句、括弧内は『万葉集』の歌番号、「註釈」は仙覺『万葉集註釈』の略、次が仙覺『万葉集註釈』の頁数である）。

|      |       |       |    |     |
|------|-------|-------|----|-----|
| 二〇六上 | 岩代の   | (一四一) | 註釈 | 三五  |
| 二〇八下 | とし火の  | (二五四) | 註釈 | 六八  |
| 二一〇下 | まつち山  | (二九八) | 註釈 | 八〇  |
| 二一七上 | おとめこか | (五〇一) | 註釈 | 一三三 |
| 二一八上 | 思はぬを  | (五六一) | 註釈 | 一四四 |
| 二二二下 | 玉しまの  | (八五四) | 註釈 | 一七二 |
| 二二四上 | いさやこら | (九五七) | 註釈 | 一九〇 |

これを見ると、宗祇『万葉抄』の頁が進むにつれて仙覺『万葉集註釈』の頁数も移行していることが分かる。つまり、万葉歌の配列について両者はこの七首の範囲で



一致しているとみてよい。それは両者がともに『万葉集』の注釈書として、『万葉集』の配列に忠実であろうとした結果ではないかと考えられる。次に本文の異同に關してであるが、右の七首のうち、仙覺『万葉集註釈』において全句に訓の示されている歌は、次の二首のみである。

二一〇下 マツチャマユフコエユキテイホサキノス  
ミタカハラニヒトリカモネム

二二二下 タマシマノコノカハカミニイヘハアレト  
キミヲヤサシミアラハサスアリキ

この二首について、宗祇『万葉抄』は仙覺『万葉集註釈』に「全句一致」している。

まつち山タこえ行ていほ崎のすみた河原に独かもねん  
(宗祇『万葉抄』)

玉しまの此川上に家はあれと君をやさしみあらはさす  
ありき (宗祇『万葉抄』)

「まつち山」歌の第五句「独かもねん」は、仙覺『万葉集註釈』の「ヒトリカモネム」に準ずるものとみなしうる。しかも注目すべきことに、『浅茅』名所部も岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』も同じ箇所を「独かもねん」と記しているのである。<sup>12)</sup>一方、「玉しまの」歌は、第一章

で述べたように、『浅茅』名所部にも岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』にも「全句一致」するのである。

ただし、右の二首を除く五首については仙覺『万葉集註釈』は、次のように部分的な訓を掲げるのみである(仙覺が正しいとする訓のみを左に掲げる)。

二〇六上(一四二) マサキクアラハ

二〇八上(二五四) アカシノナタ

二一七上(五〇二) ヒサシキヨ、リ

二一八上(五六二) オホノナルミカサノモリ

二二四上(九五七) カシヒ

したがって、これらの五首について宗祇『万葉抄』が仙覺『万葉集註釈』にどの程度一致するかは明らかではない。結局、宗祇『万葉抄』の三二首の万葉歌のうち、仙覺『万葉集註釈』に「全句一致」するのは二首のみとなり、その割合は次のようになる。

全句一致 二首 六・三%

宗祇『万葉抄』が岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に「全句一致」する先の三七・五%に比べると、この六・三%はかなり低い数値といつてよい。あまり比較に適した例ではないかも知れないが、この三二首に限れば、宗祇『万葉抄』は仙覺『万葉集註釈』よりも『名所和歌抄

出』の方に近いとみなされる。『万葉抄(宗祇抄)』と『万葉集註釈』とでは共通する歌が比較的少ない<sup>(4)</sup>という指摘も、こうしたことと関わるものかも知れない。今後なお検討が必要だが、かりに『浅茅』名所部のみならず、宗祇『万葉抄』にも少なからぬ影響を与えたとすれば、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』に近似する名所歌集は、宗祇の『万葉集』享受を考える上で、見過ごせないものとなるだろう。なお、仙覚『万葉集註釈』の場合も宗祇『万葉抄』と一致する七首の歌は前半に集中していて、『万葉集』六・九七〇以降には一首も見当たらないのである。

### 三 『名所和歌抄出』と『万葉集』

岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌には、『万葉集』の一般的な訓とは異なる本文も時に混じっている。拙著『西尾市岩瀬文庫蔵 名所和歌抄出』解題で指摘した「心たも」(『名所和歌抄出』一八六、『万葉集』四・四九〇)や「上に成けり」(『名所和歌抄出』四六三、『万葉集』八・一五四三)などである。その他にもたとえば、  
行あひのさかのふもとにひらけたる桜の花をみてん  
こも□も

(『名所和歌抄出』六五七、□は判読不能を表す)  
『万葉集』九・一七五二に当たる歌であるが、初句、第三句の訓の異同が注目される。初句について『万葉集』諸本の多くが「イユキアヒノ」、また温故堂本が「イユキアイノ」という訓を記すのに対して、細井本・神宮文庫本が「イユミアヒノ」、類聚古集は「ゆきあひの」と記す。第三句については『万葉集』諸本の大半が「サキヲセル」という訓を記すのに対して、神田本が「サキヲスル」、細井本・神宮文庫本は「サキヲスル」であるが「セ」の傍書があるという。京都大学本は「セ」を消して右傍に「ス」という朱書を付し、類聚古集は「ひらけたる」とする。『名所和歌抄出』の初句、第三句は類聚古集の訓に一致している。なお『袖中抄』<sup>(13)</sup>は「ゆきあひのさかのふもとにひらけたるさくらの花をみせんこもがも」と記し、『名所和歌抄出』の初句、第三句に一致している。

たつか弓手に取もちて朝かりに君はたちぬか手枕の  
野に  
(『名所和歌抄出』一二六)

『万葉集』十九・四二五七に該当する歌だが、第四句の訓の異同が注目される。『万葉集』では諸本の多くが

「キミハタチイヌ」と訓むのに対して、京都大学本が「キミハタチイヌ」を朱で「キミハタ、イヌ」に訂正し、古葉略類聚鈔は「キミハタ、シヌ」という説を採用している。『名所和歌抄出』の「君はたちぬか」という本文は、『万葉集』のいずれの訓にも一致していない。また『秘府本万葉集抄』<sup>14</sup>は「キミタチユキヌ」と訓む。なお『袖中抄』は同歌を「手束弓てにとりもちてあさかりにきみはたちいぬたなぐらの野に」と記し、『五代集歌枕』の「君はたちいぬ」と同様に『万葉集』の一般的な訓に一致する。ただし、『隆源口伝』は「君は立たれぬ」、『俊頼髓脳』は「君はたちきぬ」、『綺語抄』は「きみたちいぬの」、『和歌童蒙抄』は「きみはた、しぬ」、さらに『夫木和歌抄』<sup>15</sup>三十六・一六九六〇は「きみはたちきぬ」、『歌枕名寄』十一・三一二七は「キミハタチイヌ」と記して、いずれも『名所和歌抄出』には一致しない。

をく霜の木の下山の真柴にも残らぬいか名たにい  
てんかも (『名所和歌抄出』三三七)

初句、第四句、第五句について『万葉集』十四・三四八八の訓と異同がある。初句について『万葉集』の諸本のほとんどが「オフシモト」、古葉略類聚鈔のみ「ヲフ

シモト」とする。第四句について『万葉集』の諸本の大半は「ノラヌイモカナ」、古葉略類聚鈔のみ「ノナラヌイモカナ」とする。第五句については『万葉集』諸本のほとんどが「カタニイテムカモ」、類聚古集のみ「かたにいてにけり」とする。結局、『名所和歌抄出』の「をく霜の」、「残らぬいもか」、「名たにいてんかも」という本文は、『万葉集』のいずれの訓にも一致しないのである。なお、『五代集歌枕』は同歌を「おふしもこのもと山のましばにもものらぬいもがなかにいでぬかも」と記し、『夫木和歌抄』二十・八六六二は初句を「おふしもと」、第四句を「のらぬいもがな」、第五句を「かたにいでんかも」と記し、『歌枕名寄』二十・五二二四は初句を「おふしもと」、第四句を「のらぬいもかは」、第五句を「かたにいでんかも」と記して、いずれも『万葉集』の一般的な訓に近く、『名所和歌抄出』には一致しない。

事情は万葉歌のみならず、万葉集の歌句についても同様である。たとえば、  
むすきかもとに苔生るまで

(『名所和歌抄出』八三の次)

名所「香久山」に関連する万葉集の歌句である。『万

葉集』三・二五九の第五句を諸本の多くが「コケムスマ  
テニ」と訓むのに対して、類聚古集は「こけおふるまて  
に」、古葉略類聚鈔・細井本・神宮文庫本は「コケヲフ  
ルマテニ」と記し、神田本は「コケオフルマテ」と訓む。  
なお細井本は「ムスイ」という異本注記を有し、神宮文  
庫本は「ムス」の傍書を付すなどの異同がある。『名所  
和歌抄出』の「苔生るまで」という本文は、類聚古集・  
古葉略類聚鈔・神田本・細井本などに一致するとみなさ  
れる。なお、『五代集歌枕』は同歌を「いつしかも神さ  
びにけるかご山のむすぎがもとにこけおふるまでに」と  
記し、『夫木和歌抄』二十九・一三九〇九も「こけおふ  
るまで」とし、いずれも『名所和歌抄出』の本文に一致  
している。一方、『歌枕名寄』十・二九一五は「こけむ  
すまでに」と記し、『万葉集』の一般的な訓に一致して  
いる。

かしこき人

（『名所和歌抄出』八三の次）

名所「吉野」に掲げられた歌句である。『万葉集』  
九・一七二五の第二句の訓は諸本の多くが「サカシキヒ  
トノ」である。それに対して、伝壬生隆祐筆本が「かし

こきひとの」と記し、「サカシキ孝本」（別筆か）という  
傍書を有する。また、古葉略類聚鈔・西本願寺本・細井  
本・神宮文庫本は「カシコキヒトノ」と記し、古葉略類  
聚鈔には「サカシキ」との傍書がある。『名所和歌抄出』  
の本文は伝壬生隆祐筆本・古葉略類聚鈔・西本願寺本・  
細井本などに一致している。なお、『五代集歌枕』も同  
歌を「いにしへのかしこき人のあそびけんよしの、かは  
らみれどあかぬかも」と記し、『名所和歌抄出』の本文  
に一致している。さらに『古今和歌六帖』三・一五五四  
に「かしこきひとの」とあり、『夫木和歌抄』二十四・  
一一〇〇四に「かしこき人の」、『歌枕名寄』七・二一〇  
六にも「かしこき人の」とあり、いずれも『名所和歌抄  
出』に一致する。

舟よはへともかち音もせず

（『名所和歌抄出』一五の次）

名所「宇治」に関わる万葉集の歌句である。『万葉集』  
七・一一三八の第五句について諸本の大半が「カチノオ  
トモ」、近衛本も「カチノヲトモ」と訓むのに対して、  
類聚古集が「かちおとも」、古葉略類聚鈔・京都大学本  
は「カチヲトモ」、西本願寺本は「カチオトモ」とし

「ノ」を削除した痕があるという。『名所和歌抄出』の本文は、類聚古集・古葉略類聚鈔・京都大学本・西本願寺本に一致している。なお、『五代集歌枕』は同歌を「うちがはをふねわたせよとよばへどもきこへざるらしかちおともせず」と記し、『名所和歌抄出』に一致している。一方、『歌枕名寄』一・二九八は「かちのおとも」と記して、『万葉集』の一般的な訓に一致している。

以上、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の万葉歌の本文、万葉集の歌句の本文が、『万葉集』の一般的な訓と時に異なることについて考察した。一例ごとに異同の内容は異なるけれども、ごく大まかにいえば、『名所和歌抄出』の万葉歌の本文、万葉集の歌句の本文は、類聚古集や古葉略類聚鈔、細井本など、『万葉集』の次点本を中心とする古訓に近いと考えられるが、一方、『万葉集』のいずれの訓にも一致しない場合のあることも知られた。ここで再び注目されるのが第二章で紹介した渋谷虎雄氏の説である。渋谷氏は宗祇『万葉抄』について「歌の訓は、西本願寺本系のそれではなく、もう少し古い『類聚古集』・細井本等の古訓のようである」と指摘<sup>(5)</sup>されたが、それがこの『名所和歌抄出』の場合と酷似しているので

ある。しかもそのことは、宗祇『万葉抄』と『名所和歌抄出』とで、やや特殊な本文を共有する場合があると第二章で述べたこととも何らかの関連があるように思われる。『浅茅』名所部の典拠とみなされる岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』と宗祇『万葉抄』とが、ほぼ同様の『万葉集』に基づくものであるとすれば、宗祇の『万葉集』享受を考える上できわめて興味ぶかい。

### むすび

西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』を指標にして、中世の『万葉集』享受の様相を測ってみた。『万葉集』の享受において、宗祇はどのような万葉歌を受け入れ、どのような歌や訓を斥けようとしたのか。そのひとつの基準として浮上したのが、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』であったと考えられる。岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は現代ではあまり知られない名所歌集であるが、それに似た名所歌集が宗祇に用いられたらしいことからみて、中世の文学に少なからぬ影響を与えたと推測されるのであり、同時に『万葉集』の享受史から見ても重要な歌書であったと考えうると思う。今後は岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の横の広がり、たとえば同様の名所歌集が宗祇をは

じめ当時の連歌師たちにどのように享受されたかなどを見ていくことによって、当時の和歌や連歌、ひいては文学の枠組み、現代とはやや異なるかも知れないその枠組みに迫ることができるのではないかというかすかな期待も持っている。ともあれ、そうしたことの一端が解明されていれば、小論のもくろみはひとまず果たせたと思う。

# 表I 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』所収の万葉歌

西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』から万葉歌や万葉集の歌句を抜き出す際に、かりに次のような基準を設けた。万葉歌や万葉集の歌句は、『名所和歌抄出』において「万」という集付を有するもの、および「万」に続く「同」という集付を有するものに限定した。ただし、「万」、「同」という集付があっても該当する万葉歌が見当たらない場合には、数に含めないこととする。上記の基準に基づいて『名所和歌抄出』の冒頭から万葉歌を抜き出して、『万葉集』の歌番号によって示したのが次表である。万葉歌は計一五一首である（『万葉集』の歌番号は旧国歌大観による）。

一七三〇・七・一六九九・七六〇・五〇一・三〇六五・  
二二〇七・三七五・一五五七・三九〇・二六四四・三〇

九七・四八・四六・一三八一・四二五七・一八二五・一  
三一五・六六・一二一・六三・一一五六・一〇六六・一  
三六七・四九〇・三三〇一・二六四五・三〇・二六六・  
一一七一・一六九一・一一七二・一〇一七・一三五〇・  
二七一〇・二一九三・一二三一・一五三三・一八一七・  
八一・一〇三〇・一五五一・一〇二九・二四・四九六・  
五七・三三五五・三一八・二九六・三四八八・三三六  
四・三四三三・一一七六・二九八・四三三・三三八七・  
三五五五・二五一・三四一八・一二四一・二四五六・四  
三七〇・四〇九七・三八〇七・三九六・七三九・一五四  
三・二三三一・二五六・四〇二六・四〇二九・四〇二  
七・三九五五・三〇七二・四二〇一・四〇一八・四〇七  
九・四二四九・四〇二〇・三三五一・二七六三・三四〇  
〇・三〇九二・一九九・一四四三・三七一・三〇八七・  
一二三六・一三二・二二三・三〇三・九四〇・二五四・  
三一六四・三七一八・九四五・一三四四・三六三四・九  
六七・四四六・三六二一・五六七・三六三七・三六三  
一・三六三四・一二二二・九一九・一七五二・一四一・  
一二・一一九九・三五九九・二七三〇・二七二七・一四  
〇六・三〇三七・一二〇九・一二一八・一六七二・一二  
二〇・一七一〇・三〇七・三八九四・一一六〇・二五

○・三五八・二一七八・一二四六・二七八・三六七四・  
一二三〇・五六一・五七五・九五七・三六七〇・二七  
二・四一八・二三四一・三八七六・一三九三・八六五・  
三二七三・八五四・二四六・二四八・三六九六・三六九  
七・三四七五・一一一五・二七四三・三五七

表Ⅱ 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』所収の万葉集の歌句

表Ⅰと同様に岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』の冒頭から  
万葉集の歌句を抜き出して、『万葉集』の歌番号によっ  
て示したのが次表である。歌句は計二七一句である。

一五五・二四二五・二四二五・二八五六・三三三六・三  
二三六・二六四・五〇・一一三八・一一三九・二五八  
七・五一三・三八八七・一六九九・一六九九・一〇五  
八・六九六・一〇五四・一〇五八・一〇五八・三九〇  
八・三九〇七・三九〇七・五八八・二一八一・一五七  
一・五八四・一三七三・一八四五・一八八〇・四〇四・  
九四八・一九七四・一八七二・一〇四七・一四三七・一  
一〇二・一五五四・二二二二・一〇四七・一四七七・一  
八二八・一〇〇四・七一五・九四九・五九三・一五八  
五・一六三八・一〇四八・三三〇・三九七八・三九七  
八・一八六六・一五七一・九四八・一六一〇・二三〇・

四三一六・四三一九・四二九五・一〇二八・一八六六・  
二一〇一・二一九一・四五〇八・二八〇・一〇九五・一  
五一七・二二二二・二六五・三八〇六・四二八・四五・  
一一〇八・一七七五・一一〇七・二八・三三四・一八一  
二・二五九・二五七・二九〇・七四・九二〇・一一〇  
三・一一三四・二八三七・一七二五・九一三・四一〇  
〇・一一三・一八六八・九二〇・二四三・一八三一・三  
一〇三・一〇九九・二二一〇・二四五三・一一八一・二  
二九四・九七一・九七一・一四三五・一四三五・一九三  
七・一一二五・一七七三・九四・二五一二・一〇九四・  
二六五六・四一六・一三五三・四二二・二九九七・一三  
六六・一五五七・二二一〇・三二四・六二六・一九六・  
三二六七・九九二・五一・一八七八・二六八・五四三・  
四五・三五九〇・二二〇一・三五八九・一〇四七・一四  
一九・一四六六・三〇三二・三〇三二・三五七九・三六  
〇〇・<sup>16</sup>三五八・三八九五・三五九五・二五八・一一四  
〇・二七五七・四六〇・四一三・一七二六・三八七五・  
三三〇〇・二九二・四〇五六・一一四三・四三三六・四  
四六二・三九四・二七九七・二九五・三〇七六・三五〇  
三・一一五三・一一九〇・三七二二・六八・二九三・四  
四九・四四九・九四六・九四六・一〇六五・一〇六五・

一三四八・二七六六・二七七二・五六六・二一八・三一・二八八・二四四五・二四四〇・三二三八・一一六九・二七四三・一七一五・二四八七・二七五・二五一・二七五・三二三八・三〇七〇・三〇七〇・二三六〇・二二〇八・一八一八・三一五六・二七九八・三〇六・一〇三三・三二〇五・三三六〇・一一七五・三三六三・四四四〇・三三七一・三三七六・一八〇八・三四二〇・三四〇六・一七五八・四三七一・一七五八・三三五〇・三三九二・一四九七・三八三・三六六・四〇一一・三八八二・四〇六七・四〇一三・三九八五・四一九二・四〇五一・四〇一七・四〇三三・四一一六・四〇一二・四〇一一・二八六三・三〇七一・五三六・二五三・四三〇一・一七七二・一一七八・一一七九・三八八・二五五・九四一・九三九・二五二・九三八・<sup>(17)</sup>九三九・三六〇五・一一九・一二二三・一四四・一〇・一四六・一四三・一三〇・一・一六七一・一三八九・一六七一・三〇九・三六〇六・三八八・三一六七・一二〇七・三六三三・三六三八・五・一〇二三・一二三〇・九五八・一二四四・八六一・八七四・八六三・八六三

# 註

- (1) 拙稿「宗祇『浅茅』と『名所和歌抄出』」(『文藝論叢』28、大谷大學文藝學會、昭62・3)。のちに拙著『院政期以後の歌学書と歌枕』(清文堂出版株式会社、平18・10)所収。

- (2) 井上宗雄「名所歌集(歌枕書) 伝本書目稿」(『立教大學日本文学』16、昭41・6)。

- (3) 両者のより詳細な異同の検討は、紙幅の都合上、別稿に譲ることとする。第二章の宗祇『万葉抄』と岩瀬文庫藏『名所和歌抄出』との比較、また宗祇『万葉抄』と仙覚『万葉集註釈』との比較についてもそれに同じ。

- (4) 両角倉一「宗祇連歌の研究」(勉誠社、昭60・7)。  
(5) 日本古典文学大辞典「万葉集抄」(渋谷虎雄執筆の項)。

- (6) 宗祇『万葉抄』には『浅茅』名所部に見られる次の二首の歌が見当たらない。

八三 大御船さほひてさすてふ高嶋のみおのかち

の、汀そ思ふ

一〇九 むは玉のくろかみ山をけさこえて木の下露

にぬれにける哉

- (7) なお「雪はふりつ、」について、この訓は藤原清輔(『和歌初学抄』)や顕昭(『袖中抄』)ら六条藤家の人々に強い支持を得た、との指摘がある(小川靖彦「かなの文化の中の『万葉集』」(『國文学 解釈と教材の研究』44・11、平11・9)。

- (8) 島津忠夫『連歌の研究』(角川書店、昭48・3)



(9) 小川靖彦「統合されるよみ(訓み・読み)——宗祇『萬葉抄』の萬葉集訓読について〈中世と近世の間〉——」  
〔國文目白〕40、平13・2)

(10) なお、中世の多くの歌書が、『仮名万葉』を出典とする『新古今和歌集』の万葉歌の本文を踏襲するが、その傾向は宗祇『萬葉抄』にも波及する、という指摘もある(前掲注(7)小川論文)。

(11) ちなみに、『萬葉集叢書 第八輯 仙覺全集』所収の仙覺『萬葉集註釈』について宗祇『萬葉抄』と一致するのは、『萬葉集』一・七、四・五〇一、一・六六、三・二九八、三・二五四、二・一四一、三・二七八、六・九五七の八首である。

(12) ただし、これらの二書は第二句を「夕こえくれて」(岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』)と記し、宗祇『萬葉抄』の「夕こえ行て」、仙覺『萬葉集註釈』の「ユフコエユキテ」とは異なっている。

(13) 『袖中抄』ほかの歌学書の引用は、基本的に日本歌学大系正編および別巻によることとし、適宜、他本を参照する。

(14) 『秘府本万葉集抄』は『萬葉集叢書 第九輯 秘府本万葉集抄』による。なお、『冷泉家時雨亭叢書』巻第18所収『萬葉集抄』にも「キミタチユキヌ」と記すが、こちらは「ユ」がやや読みづらい。

(15) 『夫木和歌抄』ほかの歌集の引用は、新編国歌大観による。

(16) 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』(一四四)の「武庫海」

の項に「むろの木」と記されている箇所である。『萬葉集』十五・三六〇〇の「はなれそにたてるむろのき」(訓み下し文は新編国歌大観による。以下、同じ)という歌に「武庫海」は見当たらないが、同じ巻第十五の冒頭三五七八に「むこのうらのいりえのすどり」という歌があり、三六〇〇も一連の歌とみなされるので、数に含めた。

(17) 岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』(六〇七)の「藤江浦」に「藻塩焼」と記す箇所だが、「藻塩焼」に「万六長」という集付がある。『萬葉集』六・九三八「やすみししわがおほきみの」という長歌を指すかと思われる。ただし、同歌には「ふぢゐのうら」に「しほやく」が付け合 わせられていて、『名所和歌抄出』とは少し異なっている。

(本学教授)